

佐々木指月の妻トメのアメリカ

——雑誌『婦人界』（一九一八）への寄稿を中心に

堀 まどか

一 はじめに

佐々木指月（一八八二—一九四五）は、戦前のアメリカで禅を布教したパイオニアであり、日米のはざまを生きた文化人である。幼名は佐々木栄多で、「指月」は禅の道号、アメリカでは曹溪庵（Sokan）の名前で知られる。近年では、指月がニューヨークで逝去する直前に再婚した弟子のルース・フラー・佐々木（一八九二—一九六七）の^①ほうが知られているかもしれない。

佐々木指月は、臨済禅の正統な系譜を継ぐ禅僧であったと同時に、芸術家でもあった。禅者の側面（禅の布教、日英両言語での講話や翻訳執筆を含める）に加えて、芸術の側面（彫刻家、画家、美術工芸の修理修復の技術者）、文芸の側面（詩人、随筆家、小説家）など、多面的な顔をもちながら日米を行き来して多彩に活躍した。彼の禅仏教に関する英語での講演録や翻訳・解説については、戦後、ニューヨークの米国第一禅堂にのこった弟子たちが長い年月をかけて整理し記録してきた。^②だが、彼の芸術面・文芸面は戦後ほとんど顧みられることがなかった。

境界を生きた指月が日本やアメリカ移民地に残した文芸作品は膨大で、じつは同時代においては人気があった。彼の著作は、一見すると

「アメリカ、金、女」といったテーマで俗物的にもみえるが、アメリカ社会の光と闇を描き、すぐれた日米文化比較論であり、そして禅を伝える痛快な説法の形である。かつては、『近代文明が生んだ唯一の随筆詩人』^③だと評されたこともあり、『中央公論』の「三羽鳥」の一人とみなされたことも^④ある。

ただ、多くの執筆が残されているにも関わらず、佐々木指月のアメリカでの実生活や経歴については、不明瞭な部分が多い。本人が自らの実態を赤裸々に書くことを避けているし、経緯や経歴を精密に辿れない部分が多いのである。生粋のエンターテイナーであった指月の文芸作品には巧みな創作性や抽象性があり、且つ、正確らしい固有名詞で書かれていたとしても、当時の現地の事情を知らない者にとって把握しにくい点が多い。

このような佐々木指月の見えざる経歴や執筆を逆照射する意味で、本稿で紹介する妻トメの執筆物は重要である。佐々木指月を紹介した一九一八年七月のニューヨークの邦字新聞『紐育新報』（The Japanese Times, NY）の記事のなかでは、妻トメについて、『沙港で湖畔のスピートホームを解散してから夫人は二児を撫育する傍良人に關する創作を文藝俱樂部に發表した事がある。』^⑤と紹介されていた。現在のところ筆者は、『文藝俱樂部』の中にはトメの寄稿や創作を見つけられていな

いが、『婦人界』（一九一八年）には「夫と共に米国で働いた私」の四回の連載が確認できた。一九一八年六月号、七月号（子供養育号）、八月号、十月号（婦人成功号）である。このなかでトメは、渡米後の過酷な移民生活の現実と経緯について時間順序を追って正確に詳細に書いている。

本稿では、従来まったく光の当たっていなかった日本人妻の佐々木トメに注目して、彼女が執筆したアメリカ生活の記録の内容を紹介しながら、指月の自叙的・文芸的なテキストには表現されていなかった彼らの生活部分を明らかにする。

二 佐々木トメの渡米前——日本女子大学と参禅

初めにトメについて概説しておく。佐々木トメ（一八八六—一九六二）は、一八八六（明治一九）年一月八日、盛岡市鉤屋町の卸問屋の家に、父・佐々木三五郎と母ツカの六人兄妹の次女として生まれた。⁶（本名はトメだが、本稿で扱う『婦人界』（一九一八年）への執筆では、「とめ子」の表記になっている。また没後に娘がまとめた遺稿集「コスモス」では「留子」と自ら書いていたようである。本稿では、『婦人界』執筆に関する表記を除いて、トメを用いる。）

トメは日本女子大学在学中より、居士禅⁸の道場である両忘会⁹に参禅していた。禅子としての道号は慧祥。この禅堂には当時、多くの大学生や若い知識人らが男女含めて集まって禅の修行をしていた。これらの中には、日本女子大学の学生たちも複数名おり、そのうちの一人は平塚らいてう（本名・平塚明・一八八六—一九七二）である。若き日の平塚が禅に熱中して、その参禅体験が彼女の思想形成やその後のフェミニストとしての人権意識や活動に深く影響を与えたことはよく知られ

ている。トメと平塚は同年齢で、他の日本女子大生や指月らも含めて共に何度か演劇を催した仲間であった。

同じ門下の佐々木指月とトメが、禅の師匠である釈宗活（一八七一—一九五四）の媒酌で結婚したのは一九〇六年七月二三日のことである。

三 アメリカ西海岸での移民生活

三—一 渡米とハイワードでの労働

トメの執筆する「夫と共に米国で働いた私」は、結婚と渡米の経緯から始まる。佐々木指月とトメは、共に学生時代から禅堂に通う同志であった。指月は東京美術学校の彫刻科の学生時代から禅に熱中していたが、卒業後に日露戦争に従軍し帰還したばかりの二十五歳。トメは日本女子大学卒業したばかりの二十歳。指月は彫刻家としての生活困難に直面しつつも、将来の道を切りひらく決意を抱いていた。どうかして夫を助けたいと心から思っていたのが、妻となったトメであった。《夫は、學校で學んだ以外に、木彫の方は多年してゐて、そちらには相當な自信も持つて居ましたが、（夫は修學時代にもいはゆる苦學をした人です。）生活難の伴ひがちな藝術家のうちでも、年若い彫刻家ほど生活難を味はせられるものではありません。》¹⁰と、トメは冒頭から書いている。

彼らは禅の師である釈宗活に対して絶対の信頼をおき、《師父》に対する《敬慕の情》をも持っていた。北米布教計画を聞き「一緒に行きませんか」と相談されたときには、彼らは《狂喜》した。《冷たい土のうちに隠れてゐた種子は暖かい日光を得たのです。空想は實行への翼をあたへられたのです。》と、その時の興奮をトメは回想して記している。¹¹

一九〇六（明治三九）年八月に北米へ向かう船の三等船室に乗り込む。船の甲板に立って、誰もが緊張のあまり言葉を発することができなかったという。

夫と私とは黙つて互ひに顔を見合ひました。その顔を見詰めてみると、私はその瞬間に於て、新たに夫の全體を、その願ひもその悲しみも、残るところなく理解ができ、捉へることが出来たやうに思はれました。亢奮こうふんのうちに憐みをまじへた夫の眼いろによつて、私といふ者も夫の胸に遺憾なく抱かれてゐる事を感じました。^⑫

期待と理想に胸を膨らませていた彼らは、日本では大学に通い形而上学的な〈生〉の問題に悩む、労働を知らない若者たちだった。指月もトメも、アメリカに行くまで「自炊」をしたこともなかった。^⑬ 彼らは、アメリカではスクールボーイやスクールガールとなつて、単純労働をしながら学校へ通い、日曜日には日本で大学生であつた頃と同じように禅の師僧の元で禅の教を学び続けられると考えていたのである。しかし到着後すぐに、労働環境や言語の壁に直面し、理想との乖離を痛感させられた。労働は覚悟していたものの、まず日本で稽古してきた英語が全く通じなかつたのである。彼らは到着してみても初めて、想像していた全てが《幻想》に過ぎなかつたと知つた。

釈宗活はカリフォルニアのヘイワードにある荒れ果てた土地を購入し、計画通り農業を始めようとした。弟子たちはそれぞれ労働に従事し、トメは近所の農家で女中として働く。彼女の仕事は朝五時から夜八時まで台所に立ちっぱなしで、昼の休憩はわずか三〇分、日曜日の休みもなし。一方、木の伐採をする職についた指月の労働環境はさら

に厳しかった。普通の労働者が一日に三本伐る木を、素人の指月は一本に三日かかり、賃金をもらえるところか昼の食事代を取られる状況だった。彫刻家である彼の体力や長年の生活習慣は、木こりの労働に全く適していなかった。

そのような状態のなかでも、師・釈宗活は、『三昧に入れば何だつて出来ないつて筈はない』^⑭ といつて、彼らを叱つたという。しかし、師・釈宗活の考える自立の方法としての農業も失敗であつたし、そもそも彼らはアメリカに対して何の知識も持つてなかつた。

トメは《不覺の涙》をこぼしたことがある、と書く。日本の風土ではあり得ない荒野を藪に遮られて川を渡り、闇の中を歩かなければならなかつた時、渡米後の三ヶ月を思い返して《不覺の涙》をこぼした、と。^⑮

三ヶ月が過ぎる頃、農業を知らない彼らが見よう見まねで育てた苺が市場で屈辱的扱いを受けた。指月はとうとう師・釈宗活の農地経営計画に反論して、ヘイワードを飛び出した（これは従来の指月の経歴の中でもよく知られている事件である）。指月はバークレーで住み込みでの働き口をみつけて、妻を迎えに行つた。トメにとつてもヘイワードの生活があまりに過酷で、《渡米前の空想が大き過ぎた反動として失望も随分大きく》、こんな生活には耐えられないと思つており、とうとう《それ程までに信服し敬慕してゐた師僧の許を離れ》て、迎えにきた夫に従つた。^⑯

三―二 バークレーの中流家庭での家事労働

バークレーでは、指月とトメは「兄妹」として、ある弁護士の家庭に住み込みで働くことになった。ふたりが寝起きたのは母屋の別棟である鶏小屋の二階で、そこは鳥の糞の臭いがし、鳴き声が絶えず聞こ

える環境であったが、二人は「これでも私たちのスイートホーム」と表現していた。その家庭は中流階級の中程度の家庭で、一家は弁護士夫妻、七〇代の弁護士の母親（英国出身で大学教育を修めた知的な老女）、子供八人の大家族であった。トメは、アメリカの主婦の様子を詳細に書く。夫を弁護士事務所へ送り出した後の主婦は、ピアノや読書、自動車での社交訪問などを楽しむ生活が一般的で、夕刻に夫が帰宅すると、子どもたちと共に歓喜して迎え出て抱擁や接吻を交わす。このような光景は、『話や書物の上では知つてはゐたが、實際見ると、最初のうちは異様な、驚きに似た感じ』¹⁷をうけたとトメは書いた。トメは生き生きとしたアメリカ生活の実態を描いている。

トメは家の台所で大家族の食事を作り、三ヶ月後には調理全般を任せ信頼された。料理は日本家庭より豪華で、仕事の負担も次第に軽くなった。一方、夫の指月のほうは、鶏小屋から朝に出て日中は外で労働して夜に帰宅する生活で、どの仕事場でも喧嘩をしまし、三箇所の仕事場を転々とした。トメの給与は約二十ドルで、夫はその半分程度だった。彼は本来の職業である彫刻や芸術活動によって生計を立てることを希望していたものの、具体的な見通しは全く得られていなかった。この邸宅で夫妻は約六ヶ月間を過ごした。

三―三 ピードモントの茶亭と上流社会

ある日、夫が非常に良い仕事の口があると言つて、トメに新しい仕事場の面接につれていった。ピードモントはバークレーからオークランド市街へ向かう途中にあり、富裕層の別荘地として知られていた。この地域には数多くの富豪が居住し、なかでも特に著名な富豪がフランク・ヘーブン氏 (Frank C. Havens: 一八四八―一九一八) である。トメは次のように書いている。

その人 (ミスター・ヘーブン氏) は十五億萬弗の財産を持つてゐると云はれて居ます。そしてこの人は、東洋趣味を愛して、その邸宅は、外部は印度の寺院を模して造つてあります。そして又この人は、ピードモンド・パークといふ土地の名を冠らした公園を持つて居て、その内には純日本風の茶亭があります。茶亭は金閣寺を模して造つたもので、そこへ来る者には、僅の料金で日本の茶を日本式で飲ませて居ます。¹⁸ (括弧内、堀)

ピードモント公園は一八七〇年代から開発され、富裕層向けのパーティーやコンサートが催されるクラブハウスや美術ギャラリーを備えた、洗練された公園だった。その公園内のティーハウスとして重要な役割を果たしたのが日本式茶室である。一九〇七年に開いた日本式茶室は、当時アメリカ最大の日本式茶室で、京都の銀閣寺 (トメは金閣寺と書いたが) を模倣した複製建築であった (図1)。建物の部品は分解された状態で輸送され、現地で組み立てられた二階建ての構造である。茶室の門をくぐると、鯉が泳ぐ池や月橋、日本庭園風の景観を楽しむことができたという (なお、現在でもピードモント公園は存在し、同一の場所に一九七六年に再建された日本風茶室が建っている。図2)。

このピードモント公園の日本式茶室で『オリエンタルガール東洋の娘』を探しており、年齢も未婚・既婚も問わない条件だった。指月とトメはここで夫婦として正式に雇用され、トメが茶の給仕を担当し、指月はやや肉体的に厳しい業務に従事した。ここでの労働はむしろ『むしろ樂すぎる位』で、給与も急にあがつて月額四〇ドルを得られるようになった。銀閣寺の茶亭の二階の一室が二人の居住用に割り当てられ、室内には日本風の畳が敷かれ、夜は畳の上で就寝できた。トメが何よりも喜んだ



図1 銀閣寺を模倣したピードモント公園内の日本式茶室。

(History of Piedmont, est.1907, C.2025. <https://www.historyofpiedmont.com/piedmontpark>, 2025年12月15日 最終閲覧)。同写真が現地の公園内パネル紹介のなかにもある。



図2 現在のピードモント公園内の日本式茶室。

(2025年3月、筆者娘撮影)

のはピードモント公園の自然環境であり、広がる檜の木、谷間、そして差し込む日光による緑の美しさを描写している。トメはすぐに支配人からの信頼を得るようになり、二か月後には日本の着物を着用してほしいとの依頼を受けた。彼女は女学生時代に仕立てた幾枚かの派手な着物や赤い帯を行李に携えて渡米しており、それを着て茶の給仕をするようになった。一方、夫・指月のほうは支配人からの評価が芳しくなく、相変わらず仕事で不愉快な思いばかりをしていたという。

着物姿のトメは公園のオーナーをはじめ関係者から注目されていた。ある日、一人の紳士がトメに、日本から来たのか、いつ来たのか、どんな境遇か、と親しみを込めてあれこれ尋ねてきたという。トメは、夫が彫刻家で絵を習うために渡米していることを話した。この紳士が、英国人肖像画家リチャード・パーティンゲトン (Richard Langtry Parington: 一八六八―一九二九) で、当時はヘーブン家のお雇い画家であった。当時、彼はサンフランシスコ大地震及び火災で財産のほとんどを失っており、流産した妻が家で衰弱していたが、手伝いの使用人を置くことができなかった。そこで、家事労働と引き換えに無報酬で指月に絵を教えてあげよう、という提案がなされたのだった。こうして指月は油絵を学ぶ機会を得た。ピードモント公園の一角を写生するために、三脚を立てて絵を描くこともあったという。さらには、町の美術学校に通うようにもなった¹⁹⁾(従来からも、指月がパーティンゲトンから絵を学んだことは知られていたが、どのような経緯でその機会を得たのかは不明だった。ピードモントの茶亭で夫婦が暮らした事も全く知られていなかった。トメの記述からこのあたりの経緯と事情が判明した)。

トメはこの公園全体の所有者である大富豪ヘーブン夫妻から気に入られ、彼らの社交界に接し、東洋趣味の富豪たちの生活の一端を垣間みる機会を得た。茶亭でお茶の給仕をしていたトメは、ある日、ヘー

ブン夫人の依頼により、彼らの大邸宅での手伝いを命じられた。それは、当時の大統領ルーズベルト夫人の妹を歓迎するパーティーで、ピードモントの社交界に属する全ての関係者が出席する盛大な宴会であった。インドの寺院を模して建てられていた邸宅の内部は西洋風のデザインで構成されていた。煌びやかなダイニングルームとそこに続く広い階段を、ヘーブン夫人が舞踊のような優雅な足取りで上り下りする様子は「まるで演劇の一場面のように」に見えた、とトメは記す。夫人は着物の裾を階段いっぱいに広げて引きずり、頭には宝石を飾り、その姿は《一人の女と、いふよりも、何処か人ばなれがして、何だか孔雀でも見るやうな感じ》²⁰⁾だった、と。

当初、トメは富豪の邸宅で繰り広げられる音楽や舞踏の華やかさ、そして食堂のきらびやかさにただ驚くばかりであったが、しばらくしてその生活がある種の芝居じみた日常であることに気づく。トメはその大宴会以後、ヘーブン邸で勤務するようになったが、それは、彼らが東洋の女性を雇用していることを社交界に誇示して自慢するための見栄だ、とトメは冷静に分析し理解していた。しかし単に人形のように「そこにいるだけ」では時間を持て余すので、トメは犬のお守りをする役を命じられた。二〇〇〇ドルもの価値がある犬で、ヘーブン夫妻が非常に可愛がっていた。だがトメにとっては《耐へられないばかりのしい事》で、《小面倒な世話をしてゐる私には、單に莫迦犬》にしか見えなかったと書いている²¹⁾。やがて、その室内犬が家から逃げて迷子になる事件が発生し、これが他の使用人のトメに対する嫉妬による嫌がらせであったと判明する。また、中国人男性料理人からハラスメントを受けるなどの不快な経験も重なって、トメはこの邸宅からの離職を望むようになった。辞職を引き止められたものの、トメは自身の貯蓄を頼りに、ピードモントでの約一年半の生活を終えた。その頃、指月

には芸術活動を職業とする可能性が開けつつあり、トメ自身も妊娠して初産は都会で迎えたいという思いがあったためでもある。

ところで、佐々木指月もピードモントの富豪ヘーブン夫人については『米国を放浪して』（一九二二）の中に文章を書いていた。何故そのような上流階級の人々と交流があったのかについても、その頃妻と暮らしていたことも書いていない。が、純東印度風の邸宅の玄関の飾り戸に、インド風の彫刻をつけるために毎日そこに通っていたと書く。そして、休憩中に温室で巻煙草を吸い、夫人が大切にしていたアフリカ産の二羽二百ドルもする珍しい小鳥を煙で弱らせて死なせてしまう。チーフメイドと一緒に小鳥を必死で介抱したが小鳥は生き返らず、指月は夫人に陳謝した。すると、美しい夫人は冷笑を浮かべて次のように言ったという。

『東洋から来た藝術家が、過失に就てそれだけの説明をしようとは思はなかつた。活きてるものは必ず死ぬると云ふのが東洋人の、諦めではなかつたか?』と、云はれた。

私は、黙つてしまった。私は笑つていいか、赤面していいかわからなかつた。すると奥様は、次の質問を發した。

「お前は佛教を研究したと云ふが、佛教には轉生輪廻てんしょうりんねと云ふ説があるが、あの死んだ小鳥は次の世に於て何になるか?」ときかれた。私は、頭を下げて黙つて去つた。奥様は、私を呼び歸さなかつた。⁽²²⁾

これほどの女に日本では出逢つたことがなかつた、と指月は尊敬の念を示している。この夫人がニューヨークのイーストサイド（貧しい移民

地区）の生まれであつたこと、容色や智識のみから富豪の奥様になっているのではないということ、《この奥様は人間として萬人の上に位する資格を備へてゐると思つた》⁽²³⁾ことを、指月は書いた。

この出来事是一九〇八年から一九〇九年ごろだと推定できるが、この時期には西海岸の富豪たちは東洋文化に関心をもち、仏教や東洋哲学への知識を持ちはじめていたことが分かる。また、指月が仏教を学んで芸術を志す者であることが、現地の婦人たちに認識されていたのである。

三一四 サンフランシスコからメドフォードへ

ヘーブン邸を離れてサンフランシスコ市内に出た指月とトメは、長期滞在する日本人が経営する旅館の家に落ち着いた。トメの妊娠中のことであり、一九一〇年のことである。間もなくトメは日本画家の金澤（東京美術学校の第一期の卒業生）の妻の訪問を受け、裁縫の仕事の手伝いをする事になった。アメリカ人婦人の注文に応じて、日本風の着物をアメリカの生地で作立てて繕う仕事で、妊娠中のトメにも適合した仕事だった。毎日その事務所へ行き、繕いをする時には注文主の家に行くこともあった。アメリカ婦人からは、技術者として相当の敬意をもつて扱われ、トメは初めて、一つの職業によつて生活することの喜びを知つたと書く。報酬は、一日仕事に出れば二弗位は得られた。一方、夫の方はなかなかうまくいかなかつたらしい。《相當な手腕を持つて居ながらそれによつて働くことの出来ない夫は、労働をしながらも、二倍の不愉快を味はなければなりません、相變らず喧嘩をしては歸つて来るのでした。》⁽²⁴⁾とトメは記している。

この頃の指月は、新刊の日本の文学書を読み、自分でも筆を持つて文章を書き、アメリカ東海岸（トメは東都海岸と書いている）のいくつ

もの邦字新聞に寄稿しており、次第にそれによって多少の文名と報酬が得られるようになっていた。だが、やがて、周囲の日本人たちから《理由のはつきりしない、しかし可なり強い反感を持たれる》⁽²⁵⁾ようになったという。トメは次のように書いている。

私から察しますと、私は何時も容易く職業にありつけ、そして相應な興味も持てることから長續きするが、夫の方は其所がうまく行かない。さうした外部に現はれた形だけを見ると、夫は妻である私にだけ働かせて、自分は怠てゐる者のやうに見えて、そこが快く感じられなかつたのでせう。それに夫は文筆によつて、多少名を得て來た、といふことも或は他の人々に快くなかつた事かも知れません。⁽²⁶⁾

長男・牲太郎^{しんたろう}は一九一〇年十月五日にサンフランシスコで生まれた⁽²⁷⁾。出産したばかりで産褥のために横たわっていた時期、「何処か、日本人の居ない所へ行こう」と夫が言い出し、オレゴン州メドフォードの知人を頼つて移転することになった。指月に対して悪口を言っていた周囲の仲間たちも気の毒そうな顔をしたが、具体的な支援をしてくれるわけではなかつた。メドフォードへの出発前には、ストレスで母乳が止まっていたトメだが、汽車に乗ってサンフランシスコを離れた途端、また母乳が開始めたという。メドフォードまでの移動は、丸一日以上に及ぶ長時間の鉄道の旅であつた。人の前では授乳しないアメリカで、隠れるように襦袢を変えたり授乳するのが辛かつたという。汽車を降りると《さらさらと雲が降つて居て、寒空の下に寂しい町が横たわつてゐるのを見出したときの言い難い心細さ》⁽²⁸⁾と、トメは記す。一九一一年二月末のことである。この時の感情は、指月の詩「挿話」⁽²⁹⁾

(一九一五)にも表現されている。

山あいの平坦な盆地に位置する小さな町メドフォードでは、当時は労働者の数がまだ限られており、日本人は数名に過ぎなかつた。現地のいかなる労働先でも歓迎され、単純労働を行いながら比較的良好な賃金を得ることができた。ただ、働き手の多くが独身男性であり、女性労働者が極端に少なかつたことから、トメは度重なる不快な経験を余儀なくされた。

当初、夫婦は「立花」という知人の男性宅に同居していたが、立花や夫が仕事のため不在となると必ず、多数の中国人労働者が頻繁に訪れて、行動に異様な様子が認められた。次第に、これら訪問者の奇怪な行動が、立花が「今度自分が女を連れてくる」と吹聴していたせいだということが判明した。トメは移民労働者たちから売春婦かのように誤解され、好奇の視線を向けられていたのである。

また、《竹山某》という三十歳を過ぎの紳士風情の男性も問題のある人物であつた。正岡子規の弟子だと自称する竹山に対して、芸術家肌の指月は当初、「竹山くらい話せる男は、此方ではちよつと見られない」と信頼を寄せて、家に招いては文芸の話に夢中になっていた。しかしトメは、ある牧師から竹山が《婦人に對して極めて不謹慎な人》だから注意するようにと忠告されたという。指月は笑つて「何かの間違いだ、そんな事はない」と竹山を信頼し切っていた。ところが何があつたのか、竹山がトメの家への出入りを止めた途端に、指月の仕事はどこでも断られるようになった。竹山が自分の仲間と組んで、指月に仕事が行かないように仕向けたためであつた。《竹山の秘密な心の働きの爲》⁽³⁰⁾に、夫婦はメドフォードを追い出される形となつたのだつた。

こうして夫婦は、二歳になった息子を抱えてシアトルに移る。つま

り、サンフランシスコやメドフォードでは日本人労働者社会の閉鎖性や嫉妬から、嫌がらせやハラスメントを経験し、人間関係トラブルや孤立感を感じさせられていたのである。ただし、指月はそのようなことはほとんど書いてない。

指月が『中央公論』の中で『めいどふおどと云ふところ』の記憶として書いているのは、真剣に坐禅に取り組んだということだけである。神秘なるシヤスタ山の麓の丘の岩の上で、夕暮れのなかで座り、汽車の汽笛と鈴が山谷に響き、澄んだ意識と心拍が同期していき、『目前の景色はみな、わたしの肉體そのもの』⁽³¹⁾となつて、全てのものの意味が色も形も喪失していく——そのような座禅の瞑想に入り出ていく様を透徹した描写で表現していた。メドフォードについて『半年ほど過ごしたが、過去にもまた現在にも、その時ほどよく坐禅をしたことはなかった』⁽³²⁾と書くが、そこに生活感は一切見えず、妻や子とともに暮らしていたようには読み取れない。トメの執筆は、指月の執筆からは掴み取れなかった現実の移民者生活の過酷な側面を晒し出すものとなっている。

三―五 シアトルでの安定した生活

シアトルは佐々木指月にとって、渡米以来の念願であつた芸術という自身の専門職を通じて生計を立てることが可能となつた場所である。また、トメにとつても、妻および母として一家を管理する生活基盤を確立した地であり、初めて安らぎを得た時の思い出が蘇る場所⁽³³⁾だつた。

当時、シアトルには二万数千人もの日系同胞が生活しており、日本からの食材である味噌や醤油、酒、魚などがすべて揃い、日本式料理店も三十二軒存在していた。トメが特に喜びと感じたのは、過去に各

地で出会つた日本人同胞のような、『心の荒んだ、妙に底意地の悪い、海外出稼ぎ人の悪い方面ばかりを集めたやうに思はれる人』⁽³⁴⁾が殆どいなかったこと。社会的に良好な人間関係が形成されていたことである。彼女は次のように述べている。

此所に居る同胞がさうした多数であると共に、割合に高い階級の者の多いところから、自然アメリカ人から輕蔑される事の少なかつた事です。これは海外出稼人でなくては分らない感情ですが、アメリカ人が私たちの階級の者に對して常に抱いてゐる輕蔑の情、あのジャップといふ一語に籠めて、陽に又は陰に現はし通してゐる輕蔑の情、それを私たちは如何に不愉快に、如何に強い壓迫に感じて來た事でせう。ところが此所に来ると、その壓迫が著しく減じて居ました。これは私たちとしては、深い歡びとしなくては居られない事でした。實際又シアトルには、日本人の富豪も相應に多くて、輕蔑もし難く見えました。⁽³⁵⁾

シアトルに定着後、夫・指月は強い決意を抱いていた。それは、今後どんな困難があろうとも、芸術家としての本職により生計を立てること。そのためには「パンと水だけでも我慢する」ということだつた。彼の職業は彫刻家だが、彫刻だけでは生活基盤を支えることは困難であつたため、差し当たつては図案（デザイン）をすることにして広告を配布した。当初は顧客の殆どが日本人で、新聞雑誌への広告の図案や名刺への図案の作成が主だったが、次第にアメリカ人にも知名度があり、アメリカ人の顧客が主流となつていった。報酬もアメリカ人の顧客のほうが高く支払ってくれたという。ただ、図案制作の仕事は一家の生計を支えるには不十分で、トメが他の家庭に通つて労働した。

まだ乳離れしていない子供を夫に託して、朝六時から家を出るという生活をほぼ二年間続けた。

そのような頃、子供を連れて日本に帰国しようかという話が出た。ちやうど二人目の妊娠に伴い、外での勤めが困難になりつつあったのである。帰国案はトメのほうから提案して、夫はそれに対して「さういふ事にして貰はうかなあ」と同意を示すような曖昧な口調であった。ところが運命が不思議に動いて、予期せぬ転機が訪れた。ある日、シアトルの彫刻会社「モーリス・マールブル・カンパニー」の経営者でシカゴの大学教授でもあった一人の社会主義者が家を訪ねてきた。指月に図案を頼むために訪問してきたのだが、彼の本業が彫刻だとわかると、自分の彫刻会社に勤めないかと雇用を提案した。仕事は月給五十弗だった。この話を受けて、二人目を妊娠していたトメは帰国をとりやめた。朝の八時から夕方五時まで働く「会社勤め」となった指月には、日曜日にも夏季休暇もあった。しかし、この会社は半年もしないうちに破産してしまったという。一九一三年一月十日に第二子の長女・生子^{せいこ}がシアトルのウェラー街で生まれた³⁶。

その後は、指月は象牙細工の注文制作をおこなうようになった。印籠や煙草入れの縮緬めの装飾品に用いる象牙細工が、アメリカで流行していたのである。この仕事は相当な収入のある仕事で、三年間は続けたという。さらにその後、アメリカ人経営の大型美術品店に彫刻家として就職し、同様の勤務時間（朝八時から夕方五時まで）と休日のある条件で、週二〇ドルの報酬を得て、生活が安定した。それとともに一家は、シアトル郊外のグリーン・レーク（Green Lake）近辺の一軒家に住居を構えた。市内に続く路面電車が敷設されたばかりのエリアで、遠くには森林を望む自然豊かな環境だった。この時期は、トメや指月や子供たちにとって、もっとも幸せな時間であったといえよう（図3）。

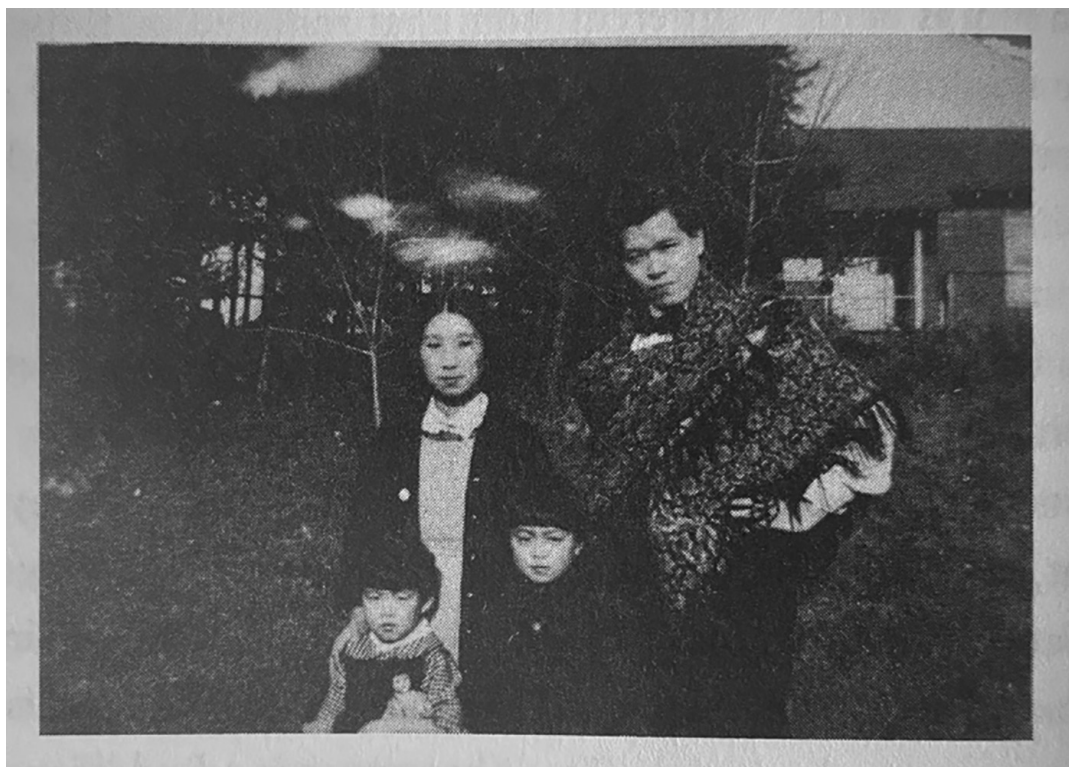


図3 シアトル時代の佐々木一家。

(Micheal Hotz, ed., *Holding the Lotus to the Rock: Autobiography of Sokei-an, America's First Zen Master* (The First Zen Institute of America, 2002, p.102.)

三六 三人目の妊娠と産児制限への社会的压力

三人目の妊娠がわかったとき、帰国を考えなければならなくなった。夫のほうから先に、妻の体力が耐えられないのではと氣遣うようになったという。日本の方が物価も安くて安心して暮らしていけるということ、老母も子守を手伝ってくれるだろうということ、また長男が学齡期になり日本で教育を受けるほうが良いという理由などがあつた。日系移民たちの議論のなかで、学齡になった子供たちを日本で教育させるべきだという考えは確かにあつた。

ただ、トメが一番問題にしていたのは、アメリカ社会における産児制限の風潮のなかでの多産への恥辱であつた(このような点は、従来の指月の執筆からは決して出てきたことがない)。トメは次のように書いている。

が、さう云つて居る裏面には、夫の心にも、私の心にも、三人の親になるなんて見つともないといふ心持が可なり強く働いて居た事も掩ひ難い事實でした。三人の子持！これはアメリカ人としては稀有な事實であると共に、稀有なまでの無智の表現なのです。⁽³⁷⁾

アメリカ人夫婦は、子を持たない選択をするものもあるし、子供を持つても一人か二人を上限としており、《二人以上の子を持つて居るのは百人に一人位の割合》だと、トメは書いた。子育てに教育費がかかる点もあるし、また、自分の妻を《愛すべき美しいものとして置きたいといふ男子の要求》⁽³⁸⁾があつて、出産で女性の美の衰えていくことを嫌う心があるからだ、と。アメリカ社会では、子供が多い家庭に対して、苦々しく思われている。それを知らなければ氣にならなかつたのだろうが、一度知つてしまうと、アメリカ社会の傾向に捉われてしま

う。《三人の子持、といふ事については、夫も私も、云はず語らずの中に、「そんな所は見せたくない」といふ、此方でいへば愚劣にさへ思はれる一種の外見^{みえ}を感じて居たのでした。》⁽³⁹⁾とトメははつきりと書いた。一九一四年にはアメリカでは産児制限運動が始まつており、日本の雑誌でも時を待たずしてマーガレット・サンガー(二八七九―一九六六)の名が紹介され始めていた。かつての禪の仲間である平塚らいてうは一九一一年には雑誌『青鞥』を発刊して、エレン・ケイなどのフェミニズムの動きを早くから紹介していた。社会の動向を指月やトメが無知のままに過ごすことは出来なかつた。トメにとってどれほどの悲しみであり苦痛であつたろうか。夫が、三人目の子供を孕んだ自分を恥ずかしがつており帰国を望んでいるということ、自分自身もアメリカ社会のなかで無教養な女だと思われたくない、ということ。これが、トメの視点からみる母子帰国の最大の理由だったのである。

子供を連れて帰国することをシアトルの親しい日本人妻仲間らに話すと、帰国しない方が得策だ、半年もすればアメリカに戻ってくることになる、と皆が口を揃えて言つたという。アメリカ暮らしに慣れた嫁とアメリカで生まれた子供たちは、実際、《全部といつていゝ位まで》皆アメリカに舞い戻つてきていた、とトメは書いている。

ただし、トメの連載の最後には、母国では言葉が思うように言えること、精神的に圧迫されるようなところがないことを挙げて、日本の住み心地のよさを述べて終わつている。⁽⁴⁰⁾

四 終わりに

本稿では、トメの『婦人界』連載における妻の視点から描かれたアメリカ生活の実態を紹介した。紙面の関係もあつて指月の執筆との比

較分析をすることができなかったが、シアトル時代の家族の幸せな暮らしについては、指月の詩のなかにも数多く表現されている。たとえば、詩篇「薪割り」は、土曜日の夕べの子供たちと妻との楽しいひと時を描いた詩篇であるし、詩篇「君を送りて」は豊かな妻と貧しき自分の関係を懐かしむ一篇である。トメの執筆や記録がなければ、このような詩のなかの指月の気持ちを十分に読み取ることはできなかっただろうと思われる点がいくつも見当たる。

トメは三度目の妊娠をして二人の子供を連れて一九一六年に日本に帰国して以降、二度とアメリカには戻らなかった。三人目の次女・汐（しお）は一九一七年三月十五日、牛込区早稲田町で誕生した。⁽⁴⁾一九二〇年に夫・指月が釈宗活に参禅するために一時帰国したときには、早稲田の自宅に落ち着いた。一九二二年八月、夫の指月が再渡米するころから、トメはキリスト教会に通うようになったが、指月はそれに反対しなかった。指月は一九二八年に三度目の渡米をし、アメリカ生まれで米国籍をもつ長男は一九二九年、長女は一九三〇年に「帰米」し、第二次世界大戦中には強制収容所に入った。家族はバラバラになるが、指月は常に子供達とトメを気にかけて、アメリカからの仕送りを続けようとした。

一九四四年、病床で死期が近づいていた指月は、弟子で富豪の未亡人だったルース・エヴァレットと再婚する（アーカンソー州の法廷で、過去二十年間トメと別居していることを根拠に離婚手続きを取り、七月八日に離婚が認められて、八月十日に再婚した。日本側の戸籍ではトメとの離婚歴はなかった。日米戦の最中で、連絡の取りようもなかった）。その後、一九四五年五月十七日、指月はニューヨークで逝去した。

トメは戦中戦後と次女・汐の一家と暮らし、一九六二年四月六日、逝去（七十七歳）した。一方、指月の後妻となった弟子ルースは、戦

後、ニューヨークに指月が残した米国第一禅堂を継続すべく、京都の大徳寺・龍泉庵に居住して日本支社を設立、經典の翻訳や、禅を学ぶ日米の若者らの支援活動をおこなった。ルースは一九六七年に京都で逝去した。

注

- (1) 日本では、大室晃「佐々木指月」(『市原地方史研究』一九七八年)、堀岡弥寿子「佐々木指月の生涯(上・下)」(『禅文化』一九七七年二月、一九七八年三月)、堀正広「ニューヨークの禅者・曹溪庵佐々木指月―海を渡った放浪の禅者」(『禅』二〇〇一年、二〇〇二年) などがある。アメリカでは指月の言葉を用いて編纂された伝記の Micheal Hotz, ed., *Holding the Lotus to the Rock: Autobiography of Sokeian, America's First Zen Master* (The First Zen Institute of America, 2002) や、後妻ルースに光を当てた Isabel Stirling, *Zen Pioneer: The Life & Works of Ruth Fuller Sasaki* (Shoemaker & Hoard, 2006) や、Janica Anderson and Steven Zahavi Schwartz, *Zen Odyssey: The Story of Sokeian, Ruth Fuller Sasaki, and the Birth of Zen in America* (Wisdom Publications, 2018) などがある。
- (2) アメリカでは戦後、米国第一禅堂の弟子たちが、彼の英語でおこなった法話を記述・整理・編纂している。定期的な発行物 *Zen Notes* の他、*Zen Pilots: Lectures on Buddhism and Zen by Sokeian*, edited by Mary Farkas and Robert Lopez (Weatherhill, NY & Tokyo 1998) や、*Three Hundred-Mile Tiger: The Record of LIN-CHI*, translated by Sokeian. Edited by Mary Farkas, Robert Lopez and Peter Haskel (First Zen Institute of America, 2013) などがある。
- (3) 香取彪夫「隨筆人佐々木指月」『文藝：純粋文藝雑誌』五(一〇)、『(文藝社、一九二七年)、四〇～四一頁。
- (4) 高須芳次郎『名文鑑賞読本・大正時代』(厚生閣、一九三七年)、二七二頁。
- (5) 「一週一人」佐々木指月君『紐育新報』一九一八年七月二〇日、四面。
- (6) 大室晃「佐々木指月」(『市原地方市研究』第九号、一九七八年、一二五頁(大室氏は、佐々木指月の次女汐から聞き取りをし、汐がまとめたトメの遺稿集「コスモス」を実見した唯一の人である))。
- (7) 佐々木トメの遺稿集「コスモス」については現存が不明で、筆者は未見なのだが、大室晃「佐々木指月」(『市原地方市研究』第九号、一一七～一六一

- (7) 頁)のなかでトメの執筆がいくつか引用・紹介されている。
- (8) 居士禪、つまり、出家せずに実社会のなかで活躍しながら禪を修行する在家の修行者のための禪の道場である。また出家せずに在家の立場で禪の修行する男性を「居士」と呼ぶが、女性を「禪子」と呼ばれる。
- (9) 両忘会はもと今北洪川(一八一六―一八九二)が主催した居士禪の修行道場で、洪川の後に円覚寺の管長になる釈宗演が法嗣の釈宗活(一八七一―一九五四)に再興させていた。釈宗演は当時の鎌倉円覚寺の管長で、世界中の宗教者が集結した一八九三年のシカゴ万国宗教会議に参加した。この会議以降、釈はシカゴのポール・ケラスと交流する。一九〇二年には、サンフランシスコの実業家の妻アイダ・ラッセル(一八五七―一九一七)とその友人らが訪日して釈宗演に参禅、その後一九〇五年には釈宗演が一時期サンフランシスコの彼女の邸宅に招かれて仏教講義を行っている。これらの縁があり、一九〇六年に釈宗活とその弟子らが渡米する。
- (10) 佐々木とめ子「夫と共に米國で働いた私(二)」『婦人界』一九一八年六月、五八頁。
- (11) 同前、五九頁。
- (12) 同前。
- (13) トメの遺構集『コスモス』(一九六三)には、《その時はじめて私たち夫婦は自炊をやった。お部屋の窓からは馬小屋が見えた。土塀から萱ぶき屋根にはい登って南瓜の花がきいろに咲いてあった。裏手はまことにお粗末で友としては牛と馬、アブがたくさんいる。》とある(大室晃「佐々木指月」『市原地方史研究』第九号、一二八頁)。
- (14) 佐々木とめ子「夫と共に米國で働いた私(二)」前掲、六一頁。
- (15) 同前。
- (16) 同前。
- (17) 同前、六四頁。
- (18) 佐々木とめ子「夫と共に米國で働いた私(二)」『婦人界』一九一八年七月、一二三頁。
- (19) 同前、一二四頁。
- (20) 同前、一二六頁。
- (21) 同前。
- (22) 佐々木指月「貴婦人」『米國を放浪して』日本評論社、一九二一年七月、二〇八―二〇九頁。
- (23) 同前、二一〇頁。

佐々木指月の妻トメのアメリカ

- (24) 佐々木とめ子「夫と共に米國で働いた私(二)」前掲、一二九頁。
- (25) 佐々木とめ子「夫と共に米國で働いた私(三)」『婦人界』一九一八年八月、九二頁。
- (26) 同前。
- (27) 大室晃「佐々木指月」『市原地方史研究』前掲、一五七頁。(この子供の誕生日は、トメの遺稿集を実見している大室氏の記述に拠る。)
- (28) 同前、九三頁。
- (29) 佐々木指月詩「挿話」(大正四年十月作)『郷愁』国民文学社、一九一六年、一二二―一二三頁。
- (30) 佐々木とめ子「夫と共に米國で働いた私(三)」前掲、九五頁。
- (31) 佐々木指月「夏を籠りて」『中央公論』一九二二年七月、三一頁。
- (32) 同前。
- (33) 佐々木とめ子「夫と共に米國で働いた私(四)」一九一八年十月、一二四頁。
- (34) 同前、一二四頁。
- (35) 同前、一二五頁。
- (36) 大室晃「佐々木指月」『市原地方史研究』前掲、一五七頁。
- (37) 同前、一三〇頁。
- (38) 同前。
- (39) 同前、一三一頁。
- (40) 同前、一三二頁。
- (41) 大室晃「佐々木指月」『市原地方史研究』前掲、一五八頁。

付記

本稿の最後に一言、つけ加えたい。花崎育代先生との最初の出会いは、日本女子大学文学部日本文学科の学部三年時の教職課程の授業である。花崎先生の颯爽として凛としたお姿は、二、三十名いた学生皆の憧れであり、授業前には先生の魅力について語る仲間たちのおしゃべりがいつも聞こえた。皆が先輩としての花崎先生に憧れと親しみを感じていた。その後、私が研究者として進もうとしていた中で、先生からは折に触れて励ましのお言葉をいただき勇気づけていただいた。感謝の言葉がみつからない。本稿は、花崎先生への感謝と敬愛の思いを込めて、佐々木トメと平塚らいてうの二人を比較して論じるつもりだった。が、力及ばず、まだまだ今後も花崎先生のご指導・ご鞭撻が必要としている自分であることを自覚した次第である。

(大阪公立大学文学部教授)